

守られ続ける伝統の灯り —先人の思いを込めて—

角間 昭三

聞き手・加治谷梓 岩崎鼓未（石川県立穴水高等学校2年）

虫送り祭の様子

はじめに（文化を育んだ風土）

石川県鳳珠郡穴水町。日本列島中央部に突き出る能登半島の中央に位置する穴水町は、七尾北湾の入り江と奥能登丘陵からなる。町域の約75%をしめる森林では、スギやアテの人工林が広がり、山林に囲まれた山間や盆地に安定した水田と多くの集落が営まれている。そんな風土で育まれた伝統文化が、ここ宇留地地区にて守り続けられている虫送り祭、またの名をウンカ祭である。

自己紹介

名前は角間昭三といいます。生年月日は昭和3年3月30日。今は86歳で今度87歳になります。現在は2人暮らしですが、息子が2人で、孫も何人かいます。農業を営みながら虫送り祭に参加して、50代くらいから代表者などもやる

ようになりました。代表者になって、8年目です。

伝統の地 宇留地

宇留地は穴水の西、山側にあつて、三方を山に囲まれたと



角間さん宅にて



(上) 祭りが行われる境内
(右上) 宮でもらった火を持ち、水田をねり歩く
(右下) 2班に分かれ、畦道を歩く



ころです。宇留地地区の特徴は、稲作が盛んで田んぼが多いところ。見ての通り穴水町でも1番か2番目に田んぼが多くて、中島(*)とよく似たところがあります。

宇留地という名前は、うるち米という米の名前からきています。農業が盛んなので、虫送りがはじまりました。宇留地地区には正月からはじまって、11月23日の新嘗祭まで1年間に祭りが、10回あります。宇留地地区は祭が多いです。他の地区で10回も祭があるところはないんじゃないですかね。10回あってその10回全部を奉賛会という組織が請け負って仕事してきました。1月1日から始まって、ほとんど毎月あります。あるときは1日2つの祭をするときもあります。そういう祭を入れて10回も祭がある地区です。その10回のうちの1つが今は6月の終わりの最終土曜日ぐらいに毎年している虫送り祭です。6月は害虫が活発な時期だから虫送りを行うんです。

古くから純農村地域であり、出稼ぎを行わずに稲作を中心に村の経済を維持してきました。山王川という川があって、水田を耕作するには非常に都合がよかったんです。稲作を中心に製炭を副業とする程度で村の経済を維持してきたことが、今もなお虫送りが存続し続けている要因の1つであると思います。

今でこそ他の地区の人口は増えてきているけど、昔は宇留地地区が一番人口が多かった。所帯でいうと80所帯ほどの家が昔からずっと続いていました。大町や川島町(*)よりも大きかったんですよ。

*中島……石川県七尾市中島町 この地区でも昔から虫送りが行われており、穴水町と同様にして牡蠣などの特産品も似ていることから、育まれてきた文化も近いものがあると考えられる。

*大町・川島町……穴水町内の地区

虫送り祭とは(別名ウンカ祭)

虫送りというのは、当時でいう農村の知恵です。やはり、夏になると虫は明かりを求めてそのところにやってきます。それによって、紙虫がみちゅうというのと、泥虫と、昔はたくさんの被害を受けていました。宮に行って、もらった火の松明を持って、太鼓に合わせて「うんか(*) うんか出ていけ、泥虫(*) まいまいせい(*)」とかけ声で畦道を歩いて、稲につく害虫を追い払っていたのです。かけ声には「害虫やはやく宇留地からでていってくれ」という意味をこめています。

稲についた虫をはたいて落としても、朝になるとまた稲に登ってきてしまうんです。農薬というようなものもなかったし、殺虫できる方法がなかった。今でこそ技術の進歩があって、豊作という結果を生んでいますけれども、当時としてはそういう科学的なものはなく、自然の摂理によって虫の特性を役立てて少しでも虫を少なくしようとしていたんです。少しでも多くの米を収穫をしようとした願いですよ。本当はどここの農村全体でもやっていたという歴史があるんですけど、だんだん廃れていってしまったんです。昔は電柱の下に油を張って、落ちてきた害虫を動けなくしたりもしたものです。期間は短かったけれど、こんな方法も用いて害虫を駆除



皆で松明を囲む

したものです。虫送りはそんな方法の中でも神事としてずっと昔から行われているものなのです。

- *うんか……害虫（イナゴなど）
- *泥虫……稲泥葉虫
- *まいまいせい……まっけて落ちていけ

祭当日の内容

9：00～12：00

最後に火を点ける2本のヌサ作り

13：00～15：00

神事及び境内の飾り付け

16：00～19：00

参加する子どもたちに歴史のお話や注意事項の説明

19：30～21：30

松明に点火し、虫送りを実施

祭は朝から晩まで行われます。暗くなったら虫送りをするのが本番みたいなものですが、その前に境内の準備や、子どもたちへの説明も行っています。やっぱり、行事として後世に伝えていって欲しいと思いますから、分かる人だけが携わるのではなくて、町内外の子どもたちにも参加してほしいです。自分も小さい頃から農業の手伝いしながら虫送りに参加し始めました。2班に別れてそれぞれのルートを通り、火で虫を追いこんで川下にて燃やします。そのさいに、ヌサと一緒に燃やし、ヌサについている紙の燃え方で、今年の豊

作を占っています。

虫送りの歴史

宇留地の虫送りは、江戸時代から始まったといわれています。元禄時代に生類憐れみの令が出され、山犬を稲虫とともに太鼓で追い払ったのが起源といわれています。定かではないのですがね。今日まで400年間ほどずっと、1回も絶えたこと、中止したことがなくて続いているということがこの地元の自慢みたいなものです。ずっと守ってきたものですから。戦時中の男の人がいないときでも女の人たちが守ってきたという話が残っているくらいです。他のところはほとんど戦時中ぐらいからやめて、最近また復活してきたところがかかりありますけどね。ほとんどずっと行っているのは、石川県のここだけじゃないですかね。松任のほうにもずっと続けているところがあるって話もありましたけども。ずっと継続してきているのには、ひとつでもたくさんの米を収穫したいという願い、心情が込められているのではないかなと私は思います。

一致団結した行事性

この祭の光景から素直に感じられるのは一致団結した行事性への感動ですね。以前から火祭に対する興味から、火が人々に及ぼす心理的影響とは何なのか、考えたいと思っています。



(上) 写真中央が角間さん
(下) 写真右 角間さんと一緒にお話を聞かせていただいた小林さん

ました。火を象徴とする集団の行動にはその背景に父系制社会の原理があることを感じています。例えばこの宇留地であつて虫送り祭に女性は参加できなかったという伝承にも接しており、同じことが他の火祭にもいわれています。

現代の虫送り

今では簡単にしてやっている部分もありますけど、昔とそんなに変わらないです。ただ、戦争で男性が多く駆り出され、女性の人手だけでは実施するのが難しかったときに、現在の形に簡略化されるようになったといわれています。昔より、田植えと泥虫の活動時期が、10日から2週間早いです。ですが、祭の時期は変えることができないので、祭は昔のまま

です。

4つの集落があつて、各集落が1人ずつ代表者を出して、その各地区の代表者の中でのさらに代表に当たるのが私です。昔は子どもがすごく多かったですけど、今では宇留地地区自体で小学生が1人、中学生が2人か3人程度おるくらいで、今では出た人の子もたちがこの時は帰ってきてくれたりして、この虫送りを支えてくれています。役場のほうでも「里山里海体験学習」という企画で子どもさんを募集してくれて、今年は11名の子もたちにも参加してもらいました。だいたい4、50人くらいは全体で参加してくれていると思います。獅子舞や笛太鼓も参加してくれるには、やっぱり人数が多くいたほうがいいですね。

祭への想い

なかったら寂しいのが正直な気持ちです。子どもだけじゃなくて大人もですけど、10人以上子どもがいてほしいですね。それによって大人も集まるし、祭自体が賑わいます。

この虫送りですでにどれだけの虫を駆除できるかは正直分かりません。でも、毎年祭という地域の行事として、みんなで豊作を願うということに大きな意味があると思います。年にたった1日の行事ですけど、お世話する僕たちは1年をかけて準備をしています。絶やしてはいけないという思いもありますし、責任ですかね。でもこうやって協力していること自体がこの地域を守りたいという想いなのかもしれません。

今後の目標

虫送りは何百年も継続しています。ですが、石川県の中でも廃れてきています。こういう文化というものはだんだん寂れていってしまっているのです。

私たちは、祖先の素朴な願いをさらに磨きをかけて、それでもやっぱり多くの皆さん方に五穀豊穡というものも、やっぱりお米というものを大事にして欲しい。私たちが成長していくためには、お米というものは欠かすことのできない食料であるということから幼い頃から子どもたちとともに継続させていきたいです。機械化をされてもなかなか単価があがらないところに諸経費がかさむと、経営としては難しいけれども、やっぱり米は私たちが生きていくためには大事な食であるのです。小さいときから子どもたちは、ほんとの気持ちは分からなくても、私たちが虫送りをおこなったなあと記憶の中に少しでも残していきたいです。

日本は神の国だから、神とともに昔の教えをみんなに参加して知って欲しいです。先人の願いを込めて、一粒でも多くの米を栽培して豊かな社会を作りたいという願いがありますね。[取材日：2014年8月8日・11月10日]

【出典情報】

- * 1 『図説 穴水町の歴史』 図説穴水町の歴史編纂委員会
北国新聞社 平成 16 年発行
- * 2 『能登の虫送り祭り～穴水町宇留地の事例から～』
小林忠雄 加能民俗研究九号

PROFILE

角間 昭三 かくま しょうぞう

昭和 3 年 3 月 30 日・86 歳
宇留地地区虫送り祭代表

穴水町宇留地地区出身。農業を営みながら虫送り祭に参加し、50 代頃に虫送りの代表者として現在に至るまで続けている。昔から続く虫送り祭は地元住民だけに留まらず、町内外の小学校等にも体験・勉強してもらい、里山の伝統行事として次世代にも伝えていくことを継続している。



● 取材を終えての感想 ●

私は、今回 2 回目の能登の里山里海の「聞き書き」体験に参加して、やっぱり大変だと思いました。今回お話を聞くことのできた角間さんは、会う前まではどんな方かわからず、恐かったらどうしようと思っていたけれど、優しい人で安心しました。すごく丁寧に説明してくださって、不安だった私も安心して聞き書きを進めることができました。

虫送り祭は私の地元にもあり、私の地区では最後に竹を燃やすところは、河口際に集めて捨てて終了なので、宇留地地区のように最後に神社で捨てる場所など、私の所とはまた違った虫送り祭だったので、驚きました。それに、宇留地地区の虫送りは、昔、女性は禁止だったことや、1 度も途絶えたことはないというお話を聞いて驚きました。私は、この地区にそんな歴史があったのだと興味がわきました。多くの貴重なお話を聞かせていただき本当にありがとうございました。「聞き書き」研修に関わって下さった皆さん、ありがとうございました。

(加治谷梓 写真:右)

初めて「聞き書き」という体験をしました。「聞き書き」というものを全く知らず、参加してしまいましたが、地域のことをよく知ることができる貴重な機会でした。取材はとても緊張しましたが、勉強になりました。初めて虫送りという祭を知ったとき、頭にハテナマークしか浮かびませんでした。どんな祭なんだろう、何をやるんだろうと不思議ばかりでしたが、虫送りの代表者の角間さんや、小林さんに話を聞いて、よく知ることができました。資料や写真を見せてくれるながら説明して下さい、とても分かりやすかったです。

火を使い、虫を追いこんで、駆除するのはとても頭がいいなと思いました。角間さんの言うとおりの祖先の知恵は、すごいなと思いました。現代にはない考え方を今も続けていくのはとても大変だと思いましたが、それができる宇留地地区の人たちは、素晴らしいなと思いました。貴重なお話をたくさん聞かせていただき本当にありがとうございました。

(岩崎鼓未 写真:左)

